〈書評〉

『哲学する道徳――現代社会を捉え直す授業づくりの新提案――』

小笠原喜康・朝倉徹編著，東海大学出版部，2017 年 11 月　218p.
ISBN 978-4-486-02143-8 C1037
本体 2,500 円 + 税

正しい価値観や規範意識とは何か。その答えが見えにくい現代の社会において，本書は，複数の授業実践を提案することを通して，現代における新しい道徳教育を提案するものである。本書では，近年の道徳教育の改善に関する政策方針を踏まえた上で，「考えつづける力」（p.10.）を道徳性として捉え，具体的な授業提案をしている。その際に，例えば「現実世界では，確信をもって行えることはむしろ少ない。現実世界では，しばしば私たちは，悩み，躊躇し，逃避し，目をつむり・そらし，弁解する。そうした自分と向き合う努力，それが道徳的実践ではないか。」（p.8.）と述べられるように，何らかの答えを出すことよりも，考え続ける姿勢自体に重きが置かれていることが特徴的である。

本書では，「少し長いまえがき」「第 1 章」において，本書が目指す道徳教育の考え方について論じられ，2 章以降の各章において，その考え方を示す事例として 5 つの授業実践が提案されている。提案される授業実践では，「やさしさ」「偽善」などをめぐる，他者とのかかわりの問題（第 2 章）や，生殖医療を通した生命倫理の問題（第 3 章），近年のロボット開発を通した人間とは何かという問題（第 4 章），ダウン症と出生前診断を通した差別意識の問題（第 5 章），臓器移植をめぐる多様な人々の葛藤（第 6 章）といった，現代社会を象徴する様々な社会問題を真正面から取り扱っている。また，これらの実践提案の際には，豊富な教材事例や具体的な授業展開が紹介されると共に，実験授業をした際の生徒の感想も示されており，非常に実践的かつ示唆的な内容となっている。そして，これらのどの実践にも見られるのは，「多面的な視点に立って考える力を養い」（p.202.），確実な正解が出せない問いを考え続けることを目指している点であると言える。

人と人とが関わったり，人々が社会を形づくる中で，道徳の問題が生まれる。このような道徳の問題は，筆者が研究しているシティズンシップ教育の問題とも直結している。例えば，政治学者のデレック・ヒーターは，シティズンシップの歴史をたどると，自由主義と共和主義の伝統・系譜があるという（ヒーター著：田中俊郎他訳（2002）『市民権とは何か』岩波書店.）。自由主義の立場は，個人の権利や個人と社会の緩やかな互恵的関係性を強調する。それに対し，共和主義の立場は，共同体を単なる個人の寄せ集めではない有機的社会であることを強調し，公共的事柄への参加の義務の側面を強調する。わが国の道徳教育論の中でも，このいずれかの立場に重きを置くものが多様にみられるであろう（例えば，河野哲也（2011）『道徳を問い直す――リベラリズムと教育のゆくえ――』筑摩書房．松下良平（2011）『道徳教育は道徳的か？――『生きづらさ』の背景を探る――』日本図書センター．など）。

この枠組みで見た場合，本書はリベラリズム（≒ 自由主義）を擁護する研究であり，「突き詰めれば『人間の価値に違いはあるのか』という問題に向き合うこと」（p.206.）を促すものである。実際，本書では，社会的に弱い状況に立たされたり，社会的に排除される危険性のある人々や存在に目を向けることを促すと共に，私たち自身の中に無意識的に存在する差別意識や偏見と向き合うことをも促す。

一般に，リベラリズムの弊害として，他者に無関心な，自分の利益や嗜好にしか興味を持たない市民が増加するのではないかとか，公共心のようなものが薄れるのではないかという懸念が挙げられやすい。それに対し，本書はこれらの懸念に対する一つの対抗策を示しているように思われる。人間の価値を深く問いかける本書は，自分自身が持つ他者への眼差しについて，徹底的な吟味を要求している。本書で提案される実践は，「社会問題の解決に，積極的に関与すべき」等の

特定の価値を提示して終わるのではなく，絶えず自分と他者との関係や，自分と社会との関係を問い直し，考え続けることを迫るものとなっている。本書のそれらの試みを通して，生徒自身が葛藤し，価値観を揺らがせていることは，本書で示される生徒の感想からも読み取れる。

社会的から排除され得る人々や存在を無視せずに向き合い，同時に自分自身の中に潜む偏見や隠れた価値観とも向き合う。こうした絶えざる省察を促す道徳教育は，社会的な包摂を意図する民主主義社会において不可欠である。本書は道徳教育の実践として，さらには民主主義教育の実践として，重要な著作であると考える。

（評者：斉藤仁一朗）